

同志社大学

2024 年度 卒業論文

論題：大学生オーケストラサークルにおける規範からの逸脱と単位取得

社会学部 社会学科

学籍番号:1109211081

氏名:寺田 龍之介

指導教員:立木 茂雄

(本文総文字数:20063 文字)

要旨

大学生オーケストラサークルにおける規範からの逸脱と単位取得

学籍番号：1109211081

氏名：寺田 龍之介

4年間大学生オーケストラサークルに所属する筆者の経験から、大学生オーケストラサークルという社会集団の複雑性と、その社会にある規範や暗黙のルールからの逸脱行動の発生要因に関して研究したいと考えた。本稿では、楽団内の逸脱行動に影響を及ぼしていると考えられる「楽団への関与度」「練習に対する意識」「音楽性への追求」「人間関係」の4つの独立変数に加えて、楽団内のセクション、単位取得との関係に注目し、それらの関係性を明らかにすることを目的とした。

調査は Google Forms を用いて行い、SPSS にて分析を行った。加えて、楽団練習の優先度を測定するため、アルバイト、学業、プライベートとそれぞれ一対比較を行い、双対尺度法を用いて分析を行った。

結果として、練習面における逸脱行動と、楽団運営における逸脱行動でそれぞれ異なる要因があることが分かった。

キーワード：逸脱行動，学生オーケストラ，単位取得

目次

1. はじめに	1
1.1 大学生オーケストラサークルの実態	1
(1) 楽器構成, セクション構成, 役職内容	2
(2) オーケストラという社会	2
(3) 大学生オーケストラサークル内の規範と暗黙のルール	3
2. 先行研究	5
2.1. サークル活動研究	5
2.2. 逸脱行動研究	6
2.3. 目的と仮説設定	8
3. 調査方法	8
3.1. 調査概要と対象	8
3.2. 質問票と調査項目	8
3.3. 分析方法	15
4. 調査結果	16
4-1. 単純集計	16
4-2. 箱ひげ図	25
5. 考察	29
5-1. 記述統計の考察	29
5-2. 箱ひげ図の考察	31
6. おわりに	32
7. 参考文献	33

1. はじめに

今日、大学生の多くがサークル活動、部活動、同好会等の集団に所属し、学生生活を過ごしている。そして、これらの集団に所属することで得られる経験や人脈が、大学生活にとって重要な役割を果たしていることは数多くの研究で示されている（高田,2014 ほか）。これらの集団の中でも特に、大学生サークル活動は、選択肢の多さや学生主体による自由度の高さなど、これまでの学校教育活動の一環として位置付けられている高校以前の部活動（文科省）とは大きく異なっている。

高田（2015）によれば、大学生サークル集団は、学内に留まる活動が多い中学生・高校生の部活と比較すると、活動内容が非常に多様であり、自主的で自由な活動が主体となるため、個人の趣味嗜好に応じた集団に参加しやすく、仲間関係を見出しやすいとしている。また、新井（2004）によれば、サークル集団の中で幅広い年齢の人や地域社会の人との交流を通じて、目上のものに対する礼儀や尊敬の態度を学ぶことが求められるとし、幅広い人間関係やコミュニケーション能力を形成することができるとしている。

筆者自身、大学生活の4年間でオーケストラサークルに所属したが、100人以上が集う社会集団の中で主体性を持って活動し、音楽という共通の趣味嗜好を持った交友関係を広げるなど、かけがえのない経験をしてきたと感じる。一方で、サークルという社会集団で過ごしていくうちに1つの疑問が浮かび上がった。それは、サークル集団への関わり方が非常に熱心な学生から不真面目な学生まで幅広く存在している中で、サークル内の規範や暗黙のルールに従う人と従わない人が混在している点だ。ここでいう規範とは、練習への出席や提出物の締め切りを守ることなど多岐にわたるが、必ずしも不真面目な学生が規範を守らないとは限らず、サークル活動に対して非常に熱心な学生であっても規範を破ることが見受けられる。また、サークル活動に傾倒しすぎるあまり学業を疎かにしてしまい、大学に定められた単位取得への不履行、いわゆる「落単」をする者も見受けられる。当然のことながら、多くの人に参加するサークルにおいて、規範や暗黙のルールからの逸脱には本人の規範意識が大きく関わってくると考えられる一方で、それ以外の要因、すなわち外的な要因や、1つのサークルの中で管楽器と弦楽器での違いがあるのではないかと感じる。そこで、本研究では大学生オーケストラサークルにおいて、規範や暗黙のルールからの逸脱が発生する要因を明らかにしていきたい。

1.1. 大学生オーケストラサークルの実態

大学生オーケストラサークルは楽団によって多少の違いは存在するものの、大まかな楽器構成や役職構成、活動内容は共通している。名称に関して「〇〇大学交響楽団」や「〇〇大学管弦楽団」等、多様であるが、主たる構成員が大学生であり、主に管弦楽曲の演奏を目的とする楽団を、大学生オーケストラサークルとして取り扱う。毎日新聞（2018）によれ

ば、大学生オーケストラの正確な定義はなく、大学公認の団体からそうでない団体、単一の大学の名前を冠する場合から複数の大学の名前を冠する場合までさまざまであると指摘しているが、メンバーの大半が大学生であることに異論はないであろうという。ここでは、多様な形態を持つ大学生オーケストラの中で、筆者の所属している大学生オーケストラサークルを一例に、その楽器構成、セクション構成、活動内容を確認していく。

(1) 楽器構成、セクション構成

オーケストラの基本的な構成として、弦楽器・木管楽器・金管楽器・打楽器の4種の楽器群がある。また、セクション構成として、弦セクション・木管セクションに加え、楽器群のうち金管楽器と打楽器を合わせた金管打楽器セクションの3つが存在する。各セクションには構成楽器が存在し、打楽器以外の構成楽器ごとにパートが存在する。

表1 楽器構成とセクション構成

楽器群	弦楽器	木管楽器	金管楽器	打楽器
セクション	弦セクション	木管セクション	金管打楽器セクション	
構成楽器 (パート)	バイオリン ヴィオラ チェロ コントラバス	フルート オーボエ クラリネット ファゴット	ホルン トランペット トロンボーン チューバ	ティンパニ バスドラム シンバル その他多数

(2) 練習内容

オーケストラの練習内容として、大きく分けて5つ存在する。Tuttiはイタリア語で「全部」という意味を持ち、その名の通り全員での合奏を指す。Tuttiは主に学生指揮者やコンサートマスターが指導する。セクション練習は表1にある3つのセクションに分かれた練習を指し、分奏と称することもある。このセクション練習は主にセクションリーダーが指導する。パート練習は表1にある各パートに分かれた練習を指す。固定的な指導者はおらず、パートリーダー（パートトップ）が行う場合もあれば、その曲の1st奏者が行う場合やその曲の年長者が行う場合もある。個人練習はその名の通り個人単位での練習を指す。最後に、レッスンに関して、学生オーケストラは演奏会をする際に、客演指揮者を招待することがある。また、地域のプロとして活躍されている奏者を専属トレーナーとして呼ぶ

びし、練習指導を受けることがある。ここでのレッスンとは、客演指揮者による Tutti や、専属トレーナーによるセクションレッスン、パートレッスン、個人レッスンのことを指す。

表2 練習内容

練習名	練習内容
Tutti	全セクションでの合奏を指す。
セクション練習	弦セクション、木管セクション、金管打楽器セクションに分かれての練習を指す。分奏とも称する。
パート練習	パート単位での練習を指す。
個人練習	個人単位での練習を指す。
レッスン	客演指揮者やプロ奏者のセクショントレーナー、あるいは外部講師を招いての練習を指す。

以上の5つの練習内容が存在しているが、その練習比率は担当楽器や所属しているセクションによって大きく異なってくる。その理由として「乗り番」「降り番」というものが挙げられる。この乗り番とは、演奏する曲のパートの定員を指し、作曲者が楽器ごとにパートを定めたものである。例として「ブラームス交響曲第1番」の場合、フルートは1stと2ndの2パート、ホルンは1stから4thまでの4パートと定められていたり、使用打楽器はティンパニのみと定められている。この制約により、仮に打楽器パートの人数が2人以上いた場合、1人は乗り番がなく、その曲は降り番ということになる。原則として木管楽器や金管楽器、打楽器は1パートを1人が担当するため、パート内で乗り番を分配する必要がある。一方で、弦楽器は1パートを複数人が担当するため、基本的に弦楽器セクションに所属する者は、乗り番が多くなり、反対に木管楽器や金管楽器、打楽器に所属する者は乗り番が少なくなる。そして、乗り番が多いほど Tutti やセクション練習の割合が多くなり、乗り番が少ないほど個人練習の割合が高くなる傾向にある。

(3) 役職内容

表3 楽団の役職

楽団運営に関する役職	団長、副団長、財務部、事業部、渉外部、総務部 インスペクター等
------------	------------------------------------

練習や演奏面に関する役職	学生指揮者，コンサートマスター（コンサートミストレス），セクションリーダー等
--------------	--

大学生オーケストラには数多くの役職が存在しており，大きく分けて2つに分類できる．楽団の運営に関する役職として，団長，副団長，財務部，事業部，渉外部，総務部，インスペクターなどが挙げられる．インスペクターとは，客演指揮者や客演ソリストと楽団の仲介者として様々な調整を行う役職を指す．楽団の練習指導や演奏面に関する役職として，学生指揮者，コンサートマスター（コンサートミストレス），セクションリーダー等が存在しセクションリーダーは各セクションに存在している．

1.2. オーケストラサークルという社会

表1で挙げたように，大学生オーケストラサークルの中に，セクションやパートといった細かい区分が存在しており，行動単位が練習内容によって異なっている．また，乗り番制により，楽器間やセクション間で練習比率が異なっていることに加えて，全体練習日とセクション練習日が存在しており，例として水曜日は弦楽器セクションのみ練習，金曜日は弦楽器セクション以外が練習というようになっている．また，セクション練習の内容を伝えるための連絡用グループもセクションごとに分かれており，結果として，オーケストラ全体よりもパートやセクション単位での行動が多くなる傾向にある．さらに，乗り番が少なくなる傾向にある木管セクション，金管打楽器セクションに所属している者が団運営に関する役職に就くことが多く，そういった意味でも，同セクション内での交流が多くなる．

以上のことから，大学生オーケストラサークル内には，様々な活動単位や役職が存在しており，時にオーケストラ全体，時にセクションと，非常に流動性のある中で過ごし，複数の規模のコミュニティ間を行き来する一つの社会が成り立っているのではないだろうか．そして，団員がサークルに対して抱く帰属意識は，オーケストラ全体よりむしろ，自分の所属するセクションやパート内に強く宿るのではないだろうか．

1.3. 大学生オーケストラサークル内の規範と暗黙のルール

社会集団には様々な規範や暗黙のルールが存在しているが、大学生オーケストラサークルも例外ではない。ここでは、オーケストラにおける規範や暗黙のルールについて述べる。

まず、大学生オーケストラサークルの活動の大きな目標として、一つの音楽を全員で作りに上げ、演奏会を成功させることが挙げられる。この演奏会の成功のために、団員は可能な限り練習に参加し Tutti、セクション練習、パート練習などで他者と協調し、演奏の仕方を揃えることが求められる。また、個人練習を重ね、他者の足を引っ張らないレベルまで演奏を仕上げる必要がある。特に、管楽器や打楽器には乗り番の関係上、当人が練習を欠席してしまうと、その人が本来演奏していたパートを担当する者がいなくなってしまうため、練習への出席は非常に重要であるといえる。当然のことながら、サークル参加を強制するような明文化されたルールは存在しないものの、練習を過度に欠席する人や遅刻する人は周囲から冷ややかな目線を向けられることがあり、周囲からの評価に直結しやすいといえる。そして周囲から評価は、次の演奏会の乗り番が少なくなるなどの影響をもたらす場合もある。以上のように、大学生オーケストラサークル内には、練習を過度に欠席したり遅刻したりすることがないようにする不文律が存在している。

また、表3にもあるように、オーケストラ内には多種多様な役職が存在しているが、その中には団の演奏会費や団費を集める役割を持った財務部や、演奏会用のパンフレット作成に当たって様々な原稿や提出物をまとめたり、演奏会の集客状況を調査したりする広報部など、団員全員に働きかけ、団員全員からの集金や回答を必要とする役職も存在している。一方で、楽団運営にとって不可欠な役職からの働きかけであるにもかかわらず、定められた提出物を出さなかったり、団費の期限を守らない者も存在している。

2. 先行研究

2.1. サークル活動研究

サークル集団という言葉は非常に曖昧な点が多い。その理由として、大学ごとに独自の定義が存在し、また、公認サークル集団から非公認サークル集団まで幅広く存在する場合がほとんどであるためである。さらに、名称についても「〇〇部」と名乗っているサークル集団も存在していることから、部活動とサークル活動の区別が非常に困難な場合が多い。サークル集団は、原則として大学生の自主的な意思に基づいて結成され、主たる構成員が大学生であり、加入も運営も大学生の自主的意思決定に基づいているといった特徴を持つ集団とされている(新井・松井,2003)。一方で、サークル、部活動、クラブ、同好会、愛

好会など多様な名称が混在し組織の性質にバラツキが大きい（新井・松井,2003）との指摘も存在している。

大学生サークル研究がこれまで数多くなされてきた中で、大学生サークル集団の肯定的側面について焦点が当てられてきた。大学生生活におけるコミュニケーションの場としての機能や、社会性を身に着ける場としての機能が広く認められてきた。また、サークル活動に所属することで友人関係が構築され、サークル集団を大学生生活での居場所（大木・大月, 2012；大島・浜島・岩田・竹内, 2003）として捉えるようになることが分かっている。さらに、サークル集団に所属する大学生は、サークル集団での活動に不参加だった大学生や、サークル集団を退団した大学生と比較して、大学生生活における充実感や満足感が高かったことも明らかになっている（荒井・曾根・山口・迫, 1998；橋爪・高木, 1995；大島他, 2003）。

高田（2022）はサークル集団への所属が大学への帰属意識を高め、退学を防止する効果があり、また、サークル集団への所属が、平均取得単位数を高めていたことを明らかにしている。この理由として高田（2022）は、サークル集団に所属することは社会人基礎力を高めることに繋がり、サークル集団での活動を通じて、計画を立て、練習をし、実行するという行動の醸成に繋がると考え、この行動は、単位取得という課題においても有効であると予測している。また、サークル集団では、様々な人間関係が構築されることで、授業に関する様々な情報を入手することができることから、単位取得するための情報も入手しやすくなるとしている。

これまで、サークル集団への所属の肯定的側面が研究されてきた一方で、集団から抜け出しにくいという負の側面への指摘も存在する。高田（2014）は、サークル集団へ熱意をもって入ったにもかかわらず、サークル集団を辞める学生が多くいることや、所属しているサークル集団に対して不満を抱きつつも辞められないといった悩みを抱えた学生がいることを指摘している。

以上のように、サークルの意義や肯定的側面に関する研究が多い一方で、サークル内の規範や、サークル活動に傾倒するあまり、退学とまではいかないものの学業成績を悪化させたといった研究は見当たらない。また、サークル内の規範意識や逸脱行動に関する研究も見当たらない。

2.2. 逸脱行動研究

今日の逸脱行動研究は複雑化している。新田（1975）は逸脱研究には三つの基本問題があるとし、一つ目に逸脱概念の多様化による混乱、二つ目に逸脱行動の定義の問題、三つ目は調査者の倫理上の問題であると指摘する。二つ目の逸脱行動の定義の問題について新田（1975）は、社会基準や文化的に広く支持された行為基準のうち主要なものへの背反を逸脱とする定義と、多様な社会に生起する大小の規則違反やマナー、仲間内のルールへの違反も含めたオムニバス定義の二つが存在するという。本研究における大学生オーケストラサークル内の規範や暗黙のルールからの逸脱は、オムニバス定義側の逸脱行動研究といえるだろう。

また、宝月（2001）は逸脱行動研究の視点について、社会構造に力点を置く社会理論、社会家庭に力点を置く社会理論、行為者に力点を置く社会理論の3視点を紹介している。

社会構造に力点を置く代表的な社会理論として、宝月（2001）は、アノミー論（マートン）を一例に挙げており、特定の社会構造が逸脱行為を生み出すと仮定し、その構造とメカニズムを明らかにしようとするものであるという。宝月（2001）によれば、マートンのアノミー論は、人々に等しく達成することを強調する文化的目標のある社会において、それを達成するために利用可能な制度的手段が欠けている時にそうした状態への対応として逸脱が選択されることを説明する理論であるという。

宝月（2001）はまた、社会過程に力点を置く社会理論の一例として、ラベリング理論（ベッカー）を挙げており、個人や集団間の相互作用や葛藤などの社会過程を重視して逸脱行為を把握しようとするものであるという。宝月（2001）はベッカーのラベリング理論を、他者の反作用を原因論に組み込む点でユニークであるという。

最後に、宝月（2001）は、行為者に力点を置く社会理論として、ハーシのコントロール理論を挙げている。このコントロール理論はボンド理論とも呼ばれるが、人々がなぜ逸脱しないかを説明するのに四つの要素からなる「社会的絆」を使用して説明するという。四つの要素とは、両親や友達などに対して感じている「愛着」、教育や職業など真つ当なことにどれだけ時間を投資したかを示す「コミットメント」、真つ当な活動に関わる程度を示す「インボルブメント」、規範に対してどうとくべきにしたがうべきだとする「信念」であるという。そしてこの四つの要素がない者ほど欲望を抑えられず逸脱しやすいという。

以上のように、逸脱行動研究は理論の多様性や、マクロな社会を研究対象にしたものが多い一方で、新田（1975）のいう、多様な社会に生起する大小の規則違反やマナー、仲間内のルールへの違反も含めたオムニバス定義の逸脱行動に関連する研究は少ない。

2.3. 目的と仮説設定

本研究では、大学生オーケストラサークルという小さな集団ながら1つの社会を形成しているサークル集団において、日々発生する規範や暗黙のルールからの逸脱行動の発生要因を見つけるとともに、大学生サークル研究における単位取得への影響に関する仮説を検証していく。

仮説

- 1) 管楽器は音楽性の追求が高くなり、逸脱行動が減る。
- 2) 過度に練習に来る人は、単位取得への不履行が増える。
- 3) 集団での活動が多い弦セクションの方が他セクションと比較して逸脱行為が多い。

3. 調査方法

3.1 調査概要と対象

本研究で用いるデータは、私立大学の交響楽団サークル2団体と国立大学の交響楽団サークル3団体の計5団体に所属する学生（大学院生、高等専門学校生を含む）を調査対象とし、2024年11月に実施した統計調査の結果である。なお、調査はGoogle Formsを用いて行い、各団体の全体連絡用ツールにて質問票リンクを貼付する形で行った。また、調査対象のサークルが他大学からでも参加をすることが可能なインターカレッジサークルであったため、調査対象者の基本属性として所属大学ではなく、所属楽団と定めて研究を行った。私立大学と国立大学のサークルに調査を実施した理由は、調査対象者の所属大学に生じる偏りを少なくし、また、両大学に所属するサークルを比較するためである。

3.2. 質問票と調査項目

(1) 質問票

表4 フェイスシート項目

番号	質問内容	回答選択肢
1-1.	あなたの性別を教えてください.	1. 男性 2. 女性 3. 回答しない
1-2.	あなたの所属している交響楽団名（オーケストラ名）を教えてください.	記述回答
1-3.	あなたの年齢を教えてください.	記述回答
1-4.	あなたの学年を教えてください.	1. 1回生 2. 2回生 3. 3回生 4. 4回生 5. 大学院生 6. その他（記述回答）
1-5.	あなたの現在の担当楽器を教えてください.	記述回答
1-6.	あなたの担当楽器の経験年数を教えてください.	1. 1年未満 2. 1～3年程度 3. 4～6年程度 4. 7～9年程度 5. 10年以上
1-7.	あなたは吹奏楽の経験はありますか.	1. ある 2. ない

表5 楽団への関与に関する質問

番号	質問内容	回答選択肢
2-1.	楽団の運営に関する役職経験はありますか. (例：団長，広報や財務，ライブラリアン等)	1. 現在就いている 2. 過去に就いていた 3. 今後就く予定である 4. その他
2-2.	楽団の練習指導や演奏面に関する役職経験はありますか. (例：指揮者，コンサートマスター，セクションリーダー等)	1. 現在就いている 2. 過去に就いていた 3. 今後就く予定である 4. その他

2-3.	私は楽団組織の仕組みを理解している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
2-4.	私は各役職の仕事内容を理解している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
2-5.	私は楽団の運営に積極的に関与したいと思う.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
2-6.	自身の発現は団に対して影響力があると感じる.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
2-7.	私は楽団の運営方針に満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる

表 6 練習に対する意識に関する質問

番号	質問内容	回答選択肢
3-1.	あなたは以下の練習にどのくらいの頻度で出席していますか.	
	①tutti (合奏) ②セクション練習 (分奏) ③パート練習 ④レッスン	1. 全く出席しない 2. あまり出席しない 3. どちらともいえない 4. だいたい出席する

	⑤個人練習 ⑥練習全体	5. 全て出席する
3-2.	あなたは以下の練習にどれくらい集中していますか.	
	①tutti (合奏) ②セクション練習 (分奏) ③パート練習 ④レッスン ⑤個人練習 ⑥練習全体	1. 全く集中していない 2. あまり集中していない 3. どちらともいえない 4. わりと集中している 5. とても集中している
3-3.	私は普段の練習に遅刻しないよう心掛けている.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
3-4.	私は普段の練習内容について満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
3-5.	普段の練習頻度についてどのように感じていますか.	1. 多く感じる 2. ちょうど良い 3. 少なく感じる

表 7 音楽に関する質問

番号	質問内容	回答選択肢
4-1.	私は普段、クラシック音楽をよく聴く方だ.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-2.	私は普段、クラシックの演奏会に足を運ぶ方だ.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない

		4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-3.	私は演奏する曲を理解したいと思う.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-4.	私はクラシックに関する知識はあると思う.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-5.	私はクラシックに関する知識を増やしたいと思う.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-6.	私は楽器演奏の技術には自信がある.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
4-7.	私は楽器演奏の技術をもっと伸ばしたいと思う.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる

表 8 人間関係に関する質問

番号	質問内容	回答選択肢
5-1.	私は楽団内の交友関係が広い.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる

		5. よく当てはまる
5-2.	私は普段、楽団の人との交流が多い.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-3.	私は練習以外でも楽団の人と過ごすことが多い.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-4.	私は楽団の人間関係に満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-5.	私はパート内の雰囲気満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-6.	私は楽団全体の雰囲気に満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-7.	私は周囲からの評価に満足している.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
5-8.	私は楽団の特別な行事（合宿や打ち上げ等）に積極的に参加する方だ.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる

		5. よく当てはまる
--	--	------------

表9 楽団の優先順位と規範意識

番号	質問内容	回答選択肢
6-1.	あなたは学業と楽団の練習のどちらを優先しますか.	1. 学業を優先 2. 練習を優先
6-2.	あなたはアルバイトと楽団の練習のどちらを優先しますか.	1. アルバイトを優先 2. 練習を優先 3. アルバイトをしていない
6-3.	あなたはプライベートな予定と楽団の練習のどちらを優先しますか.	1. プライベートを優先 2. 練習を優先
6-4.	あなたは学業とアルバイトのどちらを優先しますか.	1. 学業を優先 2. アルバイトを優先 3. アルバイトをしていない
6-5.	あなたは学業とプライベートな予定のどちらを優先しますか.	1. 学業を優先 2. プライベートを優先
6-6.	あなたはアルバイトとプライベートな予定のどちらを優先しますか.	1. アルバイトを優先 2. プライベートを優先 3. アルバイトをしていない
6-7.	私は楽団内で求められる提出期限は守る方だ.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
6-8.	私は楽団の費用（団費や演奏会費）は期限内に支払う方だ.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
6-9.	私は大学における単位は必ず取得するよう心掛けている.	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない

		3. どちらともいえない 4. やや当てはまる 5. よく当てはまる
--	--	--

(2) 調査項目

調査項目は、コントロール理論（ハーシ）を参考に、オーケストラ内における規範への逸脱行動と、それに関係すると考えられる要因に基づいて作成した。質問数は43で、記述回答や特定の質問を除き、「1.全く当てはまらない」「2.あまり当てはまらない」「3.どちらともいえない」「4.やや当てはまる」「5.よく当てはまる」で回答する五件法を採用した。

独立変数の項目として「楽団への関与度」「練習に対する意識」「音楽性への追及」「人間関係」「所属する楽器セクション・パート」の5つである。「楽団への関与度」をはかる質問として（2-1.2-2.役職経験の有無）（2-3.2-4.楽団組織の理解度）（2-5.2-6.楽団への影響力）（2-7.楽団運営への満足度）を質問した。「練習に対する意識」をはかる質問として（3-2.練習の集中度）（3-4.練習内容満足度）（3-5.練習頻度に対する意識）を質問した。「音楽性への追及」をはかる質問として（4-1.4-2.クラシック音楽への興味）（4-3.4-4.4-5.音楽に対する理解度）（4-6.4-7.1-6.楽器演奏の技術と上達欲求）を質問した。「人間関係」をはかる質問として（5-1.5-2.5-3.5-4.交友関係）（5-5.5-6.雰囲気満足度）（5-7.周囲からの評価）（5-8.特別な行事への参加）を質問した。「所属する楽器セクション・パート」をはかる質問として（1-5.担当楽器）を質問し、表1における3つのセクションへと振り分けをした。

従属変数の項目には、練習面における逸脱行動をはかる質問として（3-1.練習出席頻度）（3-3.練習への遅刻）、運営面における逸脱行動をはかる質問として（6-7.6-8.提出期限の順守）、学業への影響をはかる質問として（6-9.単位取得）を質問した。また、「練習への優先度」をはかる質問として（6-1.6-2.6-3.6-4.6-5.6-6.楽団の練習、学業、アルバイト、プライベートにおける優先順位）を質問し、それぞれ一対比較を行った。

3.3. 分析方法

それぞれの回答について、基本的に「全く当てはまらない」「全く出席しない」「全く集中していない」を1点、「あまり当てはまらない」「あまり出席しない」「あまり集中していない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「やや当てはまる」「だいたい出席す

る」「わりと集中している」を4点、「よく当てはまる」「全て出席する」「とても集中している」を5点として扱った。また、「2-1.楽団の運営に関する役職経験はありますか」「2-2.楽団の練習指導や演奏面に関する役職経験はありますか」という質問の回答について、「その他」を1点、「過去に就いていた」を2点、「今後就く予定である」を3点、「現在就いている」を4点として扱った。理由として、役職経験の有無として「過去に就いていた」「現在就いている」を同点に扱うことや、「その他」すなわち役職経験なしと「今後就く予定である」を同点に扱うことは不相当であると判断したためである。また、「過去に就いていた」を2点、「今後就く予定である」を3点とした理由として、過去役職に就いていた人よりも今後役職に就く人の方が楽団の組織に対して関与度が高くなると判断したためである。「3-5.普段の練習頻度についてどのように感じていますか」という質問の回答については、「多く感じる」を1点、「ちょうど良い」を2点、「少なく感じる」を3点として扱った。

質問 6-1.6-2.6-3.6-4.6-5.6-6.に関して、「楽団の練習」「学業」「アルバイト」「プライベート」における優先順位に関しては、双対尺度法を用いて測定した。

練習面における逸脱行動をはかる質問として「3-1.練習出席頻度」「3-3.練習へ遅刻しないよう心掛けている」を質問し、「全く出席しない」「全く当てはまらない」を5点、「ほとんど出席しない」「あまり当てはまらない」を4点、「どちらともいえない」を3点、「だいたい出席する」「やや当てはまる」を2点、「全て出席する」「よく当てはまる」を1点とした。運営面における逸脱行動をはかる質問として「6-7.6-8.提出期限の順守」を質問し、「全く当てはまらない」を5点、「あまり当てはまらない」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや当てはまる」を2点、「よく当てはまる」を1点とした。学業への影響をはかる質問として「6-9.単位取得を心掛けている」を質問し、「全く当てはまらない」を5点、「あまり当てはまらない」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや当てはまる」を2点、「よく当てはまる」を1点とした。

上記の作業を行った後、SPSSを用いて分析を行い、仮説を検証していく。

4. 調査結果

4.1. 単純集計

(1) 回答者の属性

表 10 性別

性別	度数	%	有効%	累積%
女性	81	65.9	65.9	65.9
男性	42	34.1	34.1	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 11 年齢

年齢	度数	%	有効%	累積%
18 歳	10	8.1	8.1	8.1
19 歳	28	22.8	22.8	30.9
20 歳	29	23.6	23.6	54.5
21 歳	30	24.4	24.4	78.9
22 歳	19	15.4	15.4	94.3
23 歳	7	5.7	5.7	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 12 学年

学年	度数	%	有効%	累積%
1 回生	31	25.2	25.2	25.2
2 回生	30	24.4	24.4	49.6
3 回生	25	20.3	20.3	69.9
4 回生	33	26.8	26.8	96.7
高専 4 年生	1	0.8	0.8	97.6
大学院生	3	2.4	2.4	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 13 大学種別交響楽団

大学種別交響楽団	度数	%	有効%	累積%
私立大学交響楽団	73	59.3	59.3	59.3
国立大学交響楽団	50	40.7	40.7	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 14 楽器別単純集計

楽器別単純集計	度数	%	有効%	累積%
ヴィオラ	5	4.1	4.1	4.1
オーボエ	5	4.1	4.1	8.1
クラリネット	8	6.5	6.5	14.6
コントラバス	8	6.5	6.5	21.1
チェロ	9	7.3	7.3	28.5
チューバ	4	3.3	3.3	31.7
トランペット	6	4.9	4.9	36.6
トロンボーン	9	7.3	7.3	43.9
バイオリン	30	24.4	24.4	68.3
ファゴット	5	4.1	4.1	72.4
フルート	8	6.5	6.5	78.9
ホルン	13	10.6	10.6	89.4
打楽器	13	10.6	10.6	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 15 セクション別単位集計

セクション別単純集計	度数	%	有効%	累積%
弦セクション	52	42.3	42.3	42.3
木管セクション	26	21.1	21.1	63.4
金管打楽器セクション	45	36.6	36.6	100.0
合計	123	100.0	100.0	

表 16 楽器経験年数

楽器経験年数	度数	%	有効%	累積%
1年未満	6	4.9	4.9	43.9
1～3年程度	14	11.4	11.4	11.4
4～6年程度	23	18.7	18.7	62.6
7～9年程度	46	37.4	37.4	100.0

10年以上	34	27.6	27.6	39.0
合計	123	100.0	100.0	

質問票の回収数は123であり、有効回答数も123であった。回答者の性別は、男性が34.1% (n=42)、女性が65.9% (n=81)、その他が0% (n=0)であった。回答者の年齢は、18歳が8.1% (n=10)、19歳が22.3% (n=28)、20歳が23.6% (n=29)、21歳が24.4% (n=30)、22歳が15.4% (n=19)、23歳が5.7% (n=7)であった。回答者の学年は、1回生が25.2% (n=31)、2回生が24.4% (n=30)、3回生が20.3% (n=25)、4回生が26.8% (n=33)、高専4年生が0.8% (n=1)、大学院生が2.4% (n=3)であった。大学種別の回答数は、私立大学所属楽団が59.3% (n=73)、国立大学所属楽団が40.7% (n=50)であった。回答者の所属セクションは、弦セクションが42.3% (n=52)、木管セクションが21.1% (n=26)、金管打楽器セクションが36.6% (n=45)であった。回答者の楽器経験年数は、1年未満が4.9% (n=6)、1～3年程度が11.4% (n=14)、4～6年程度が18.7% (n=23)、7～9年程度が37.4% (n=46)、10年以上が27.6% (n=34)であった。

(2) 記述統計

・楽団への関与度

楽団への関与に関する項目の回答をグラフ化すると以下の図1, 2の結果となった。図1の楽団内役職経験の内訳では、練習に関する役職経験者よりも楽団運営に関する役職経験者の方が多く結果となった。また、図2では「自身の発言団に対して影響力があると感じる」という質問に対して、「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」と回答した人が約半数という結果となった。

図1 楽団への関与度に関する回答1

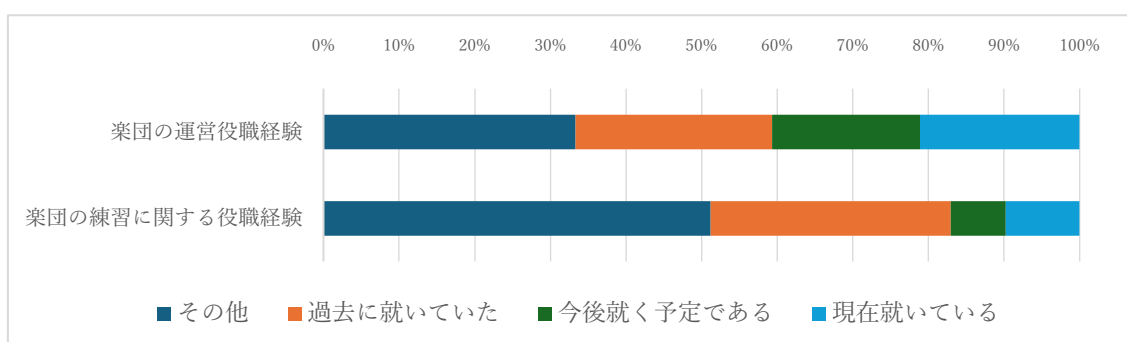
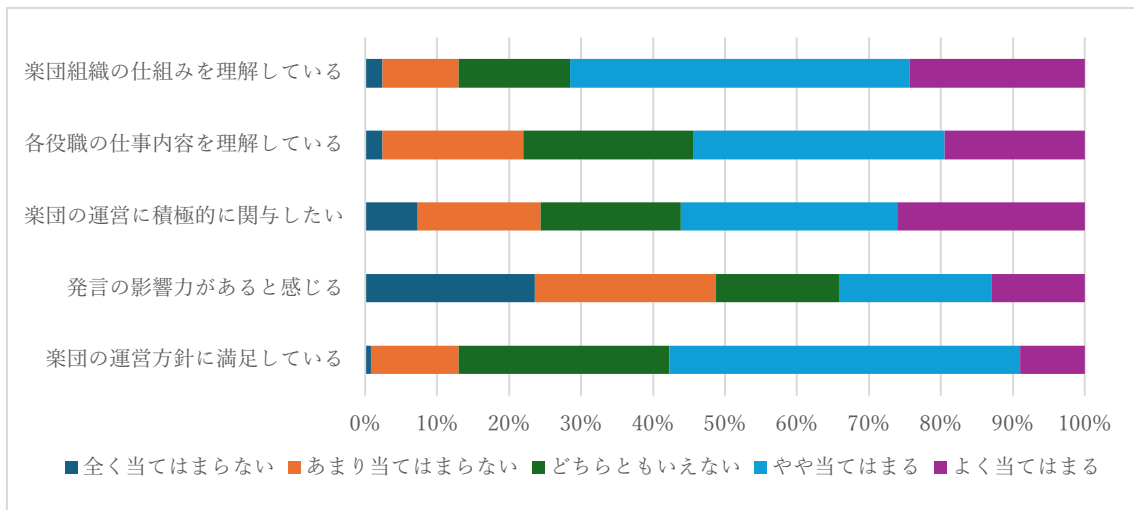


図2 楽団への関与度に関する回答2



・練習への意識

練習への意識に関する項目の回答をグラフ化すると以下の図3, 4, 5の結果となった。図3の練習集中度に関する回答ではレッスンの集中度が非常に高く、反対に個人練習の集中度がやや低い結果となった。また、Tutti、セクション練習、パート練習に対する集中度にはあまり違いが見られない結果となった。図5「練習頻度についてどのように感じるか」という質問に関しては、約8割の人が「ちょうど良い」と回答する結果となった。

図3 練習集中度に関する回答

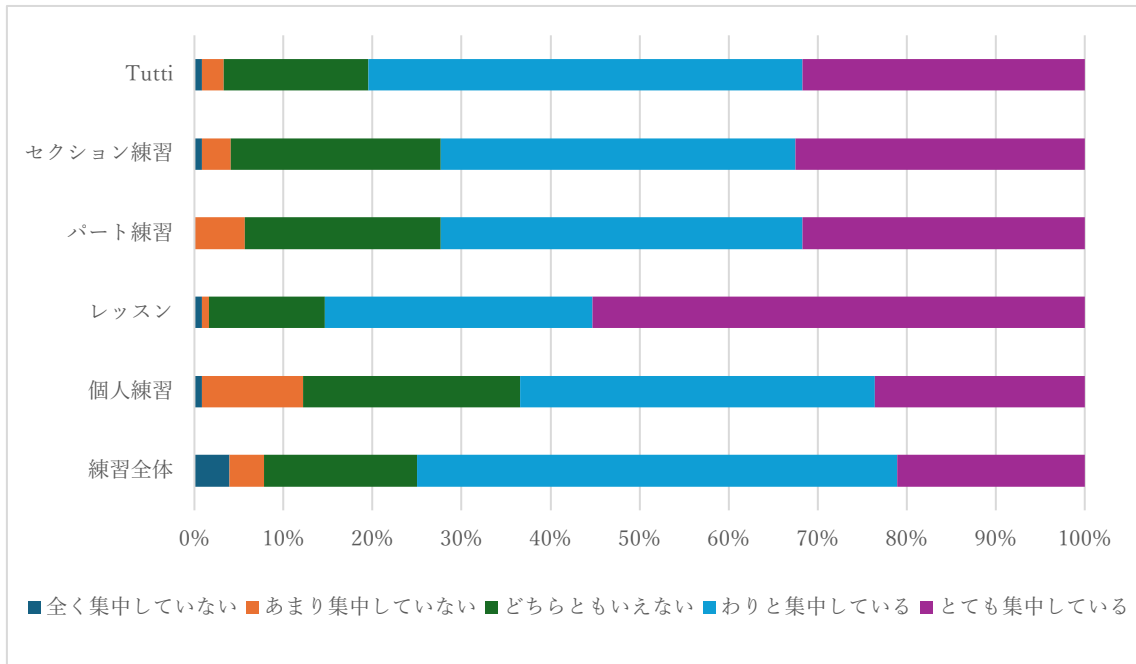


図4 練習への意識に関する回答1

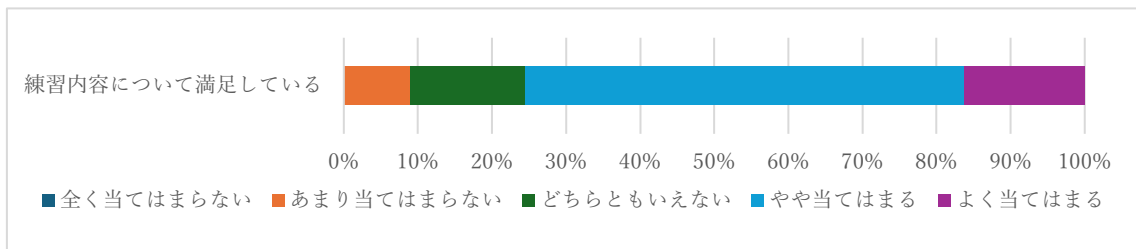
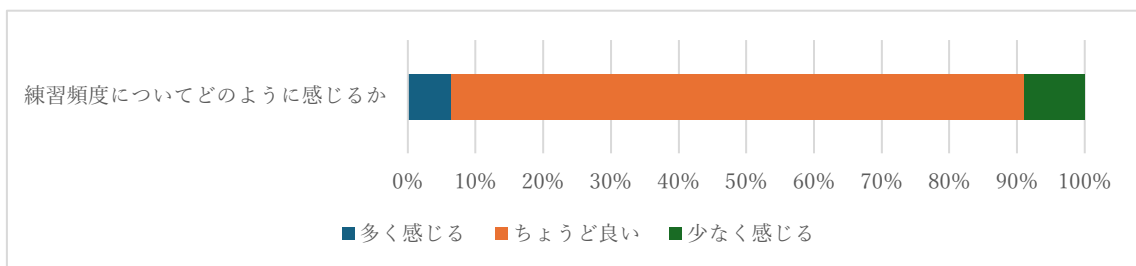


図5 練習への意識に関する回答2



・音楽性への追求

音楽性への追求に関する項目の回答をグラフ化すると以下の図6, 7の結果となった。図6に関して、「クラシックに関する知識はある方だ」「楽器演奏の技術には自信がある」という質問に対して、「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人が、他の

質問と比較して少ない結果となった。また、「クラシックに関する知識を増やしたいと思う」という質問に「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人よりも、「楽器演奏の技術をもっと伸ばしたいと思う」という質問に関して「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人が多く、9割以上を占めているといった結果となった。

図7、楽器経験年数に関しては、「7~9年程度」「10年以上」と回答した人が約6割という結果となった。

図6 音楽性への追及に関する回答

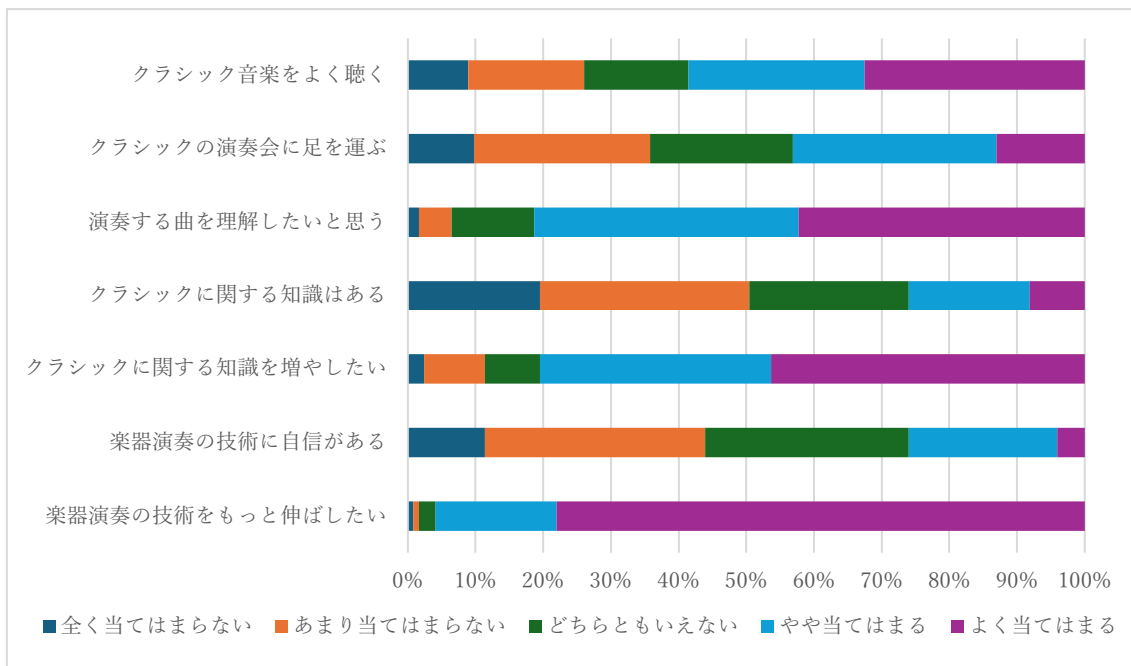
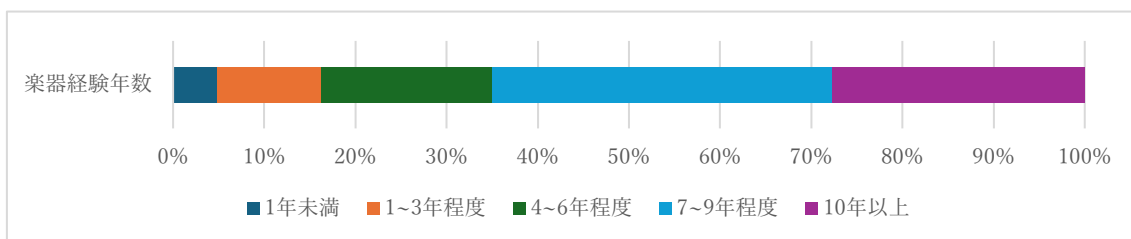


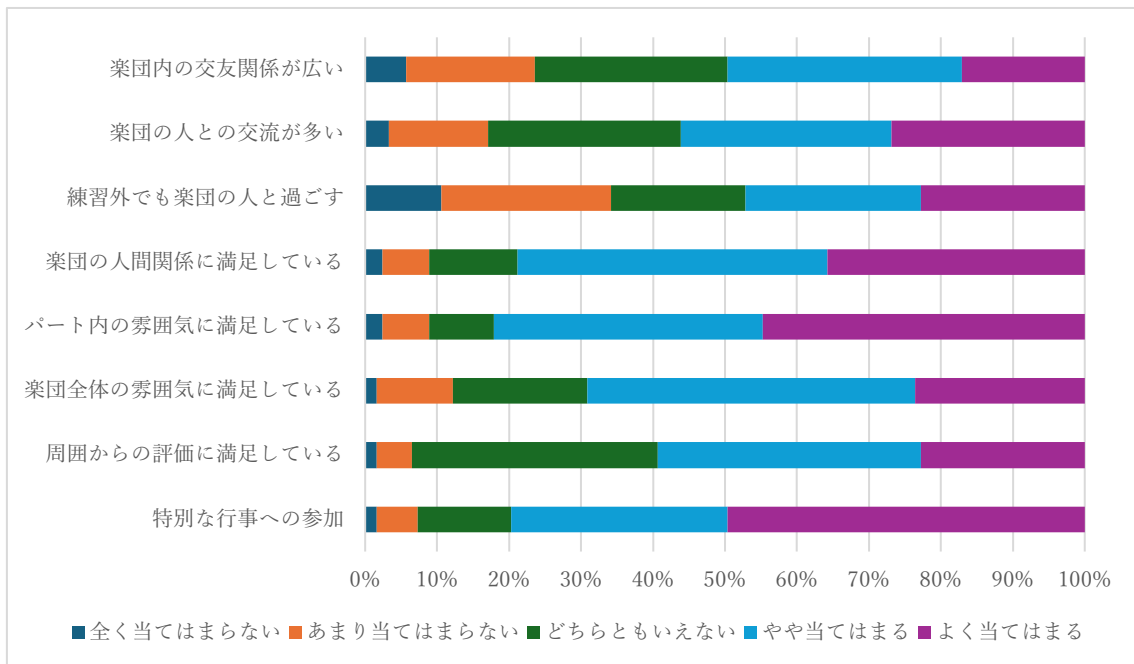
図7 楽器経験年数



・人間関係

音楽性への追及に関する項目の回答をグラフ化すると以下の図8の結果となった。「パート内の雰囲気満足している」という質問に「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人と比較して、「楽団全体の雰囲気満足している」という質問に「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人が少ないという結果となった。

図 8 人間関係に関する回答



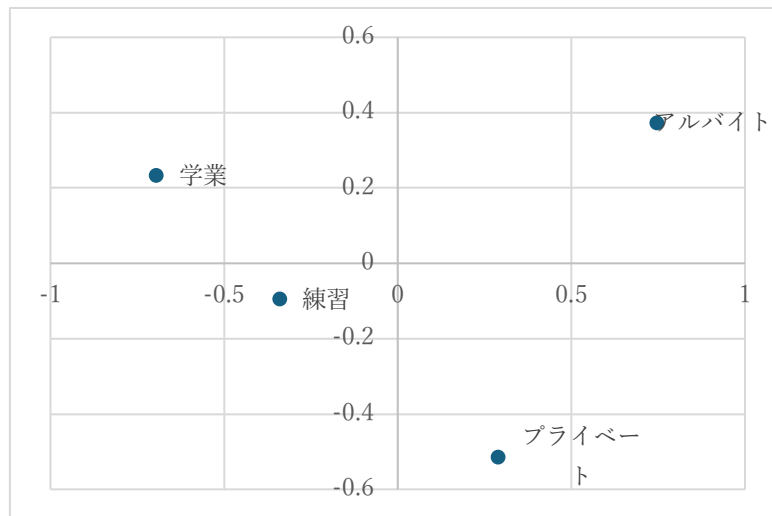
・アルバイト、学業、楽団の練習、プライベートの優先順位

アルバイト、学業、楽団の練習、プライベートの優先順位をグラフ化すると以下の図 8 の結果となった。次元 1 の寄与率は 59.2 であり主成分、次元 2 の寄与率は 22.3 であり、補助的主成分である。アルバイトは次元 1.2 とともに正の寄与率が高く、学業は次元 1 に関して負の寄与率が高い。また、練習は次元 1.2 とともに負の寄与率が大きく、プライベートは次元 2 に関して負の寄与率が高い。

図 9 双対尺度法結果

	次元1	次元2
固有値	0.3	0.1
固有値平方根	0.6	0.3
寄与率	59.2	22.3

図 10 相対尺度法グラフ化



・逸脱行動

逸脱行動に関する項目の回答グラフ化すると以下の図 8 の結果となった。「レッスン出席頻度」が最も高く、反対に「個人練習出席頻度」が最も低い結果となった。

図 11 逸脱行動に関する回答

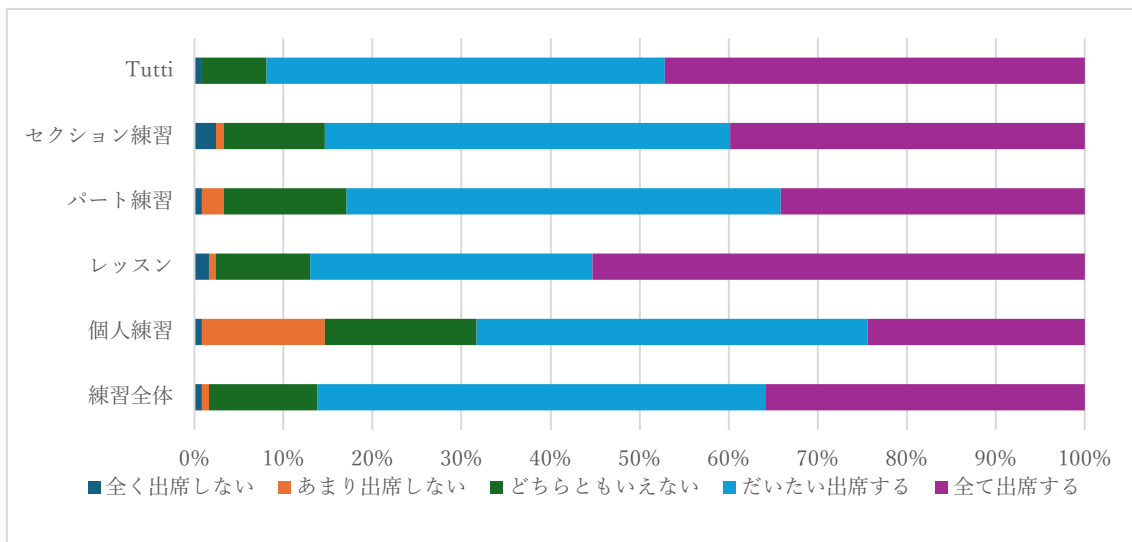
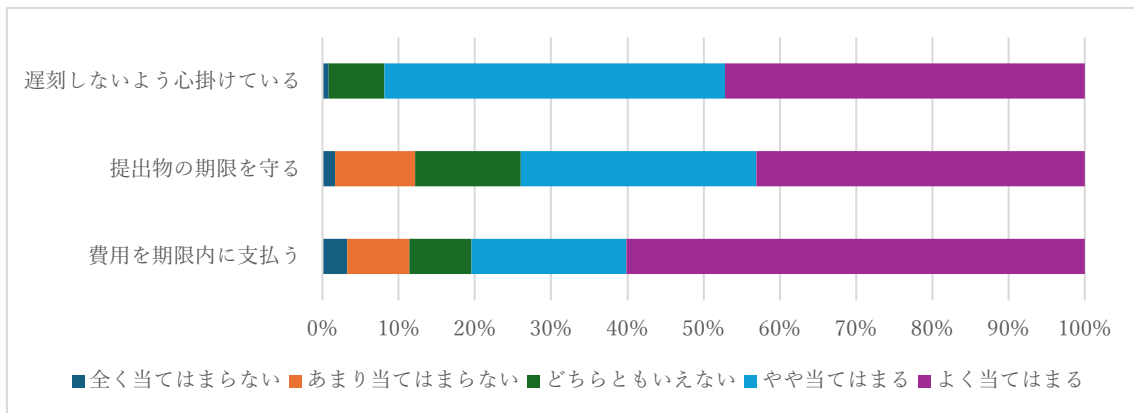


図 12 逸脱行動に関する回答-2



4-2. 箱ひげ図

図 13

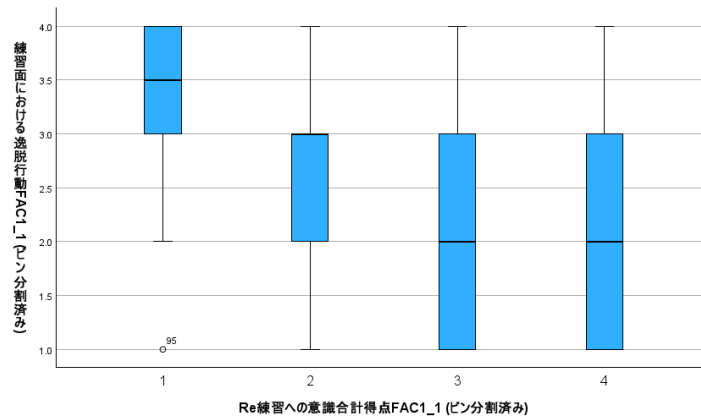


図 13 の箱ひげ図では「練習への意識」と「練習面における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、練習への意識が低ければ低いほど練習面における逸脱行動、つまり欠席や遅刻が多いことがわかる。

図 14

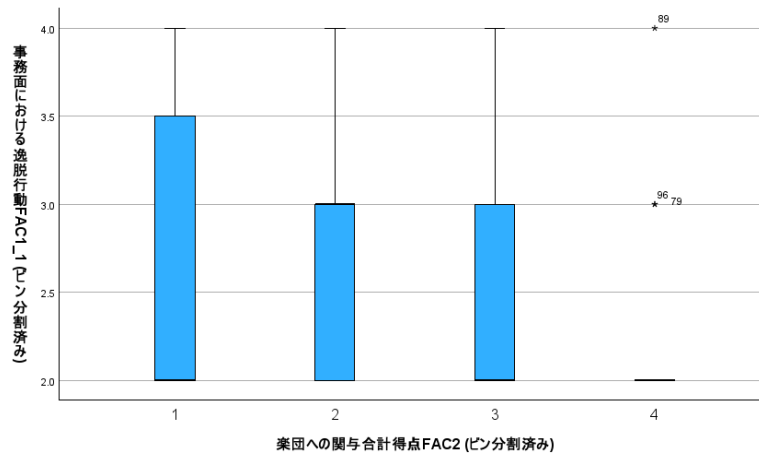


図 14 の箱ひげ図では「楽団への関与度」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、楽団への関与が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。

図 15

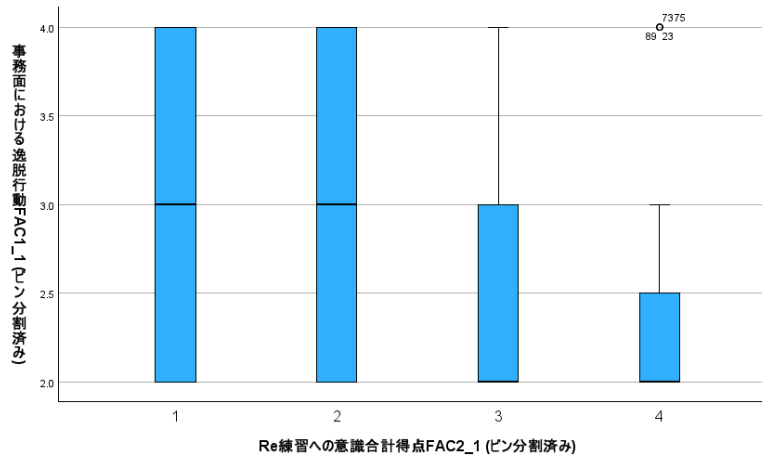


図 15 の箱ひげ図では「練習への意識」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、練習への意識が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。

図 16

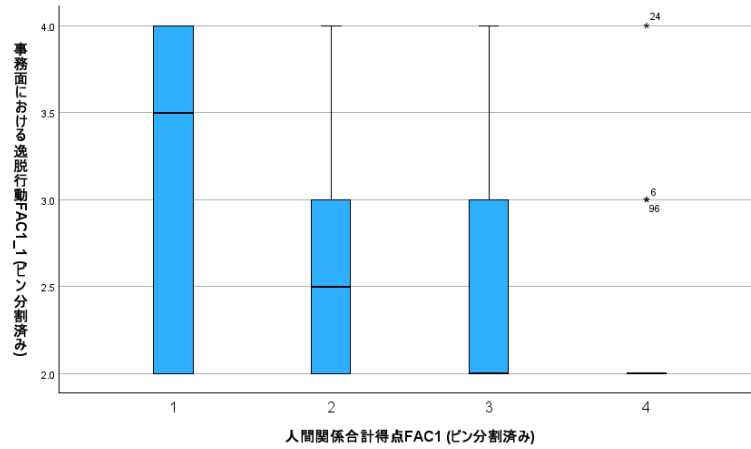


図 16 の箱ひげ図では「人間関係」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、人間関係の値が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。

図 17

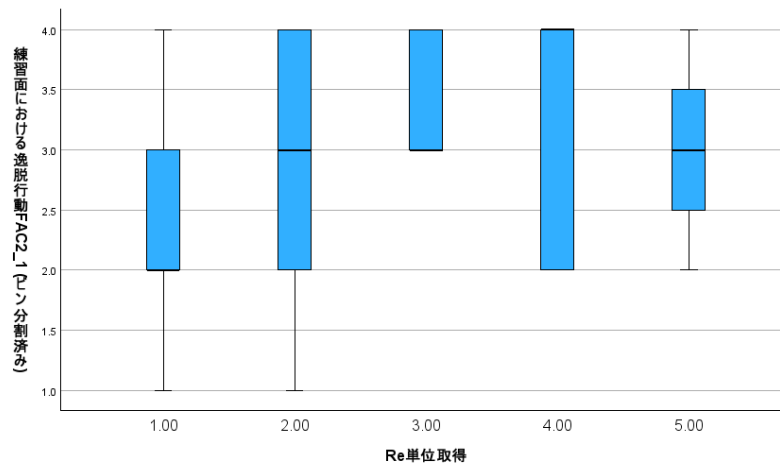


図 17 の箱ひげ図では「単位取得への不履行」と「練習面における逸脱行動」には弱い正の相関がみられた。すなわち、単位取得への不履行をすればするほど練習面における逸脱行動も高くなることがわかる。

図 18

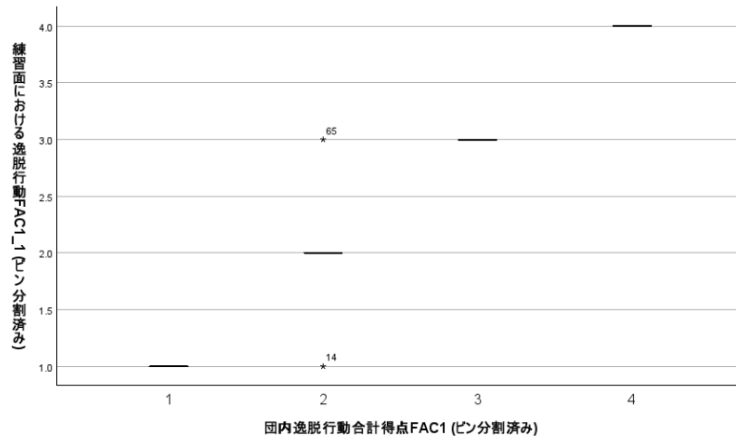


図 18 の箱ひげ図では「団内逸脱行動合計」と「練習面における逸脱行動」には正の相関がみられた。

図 19

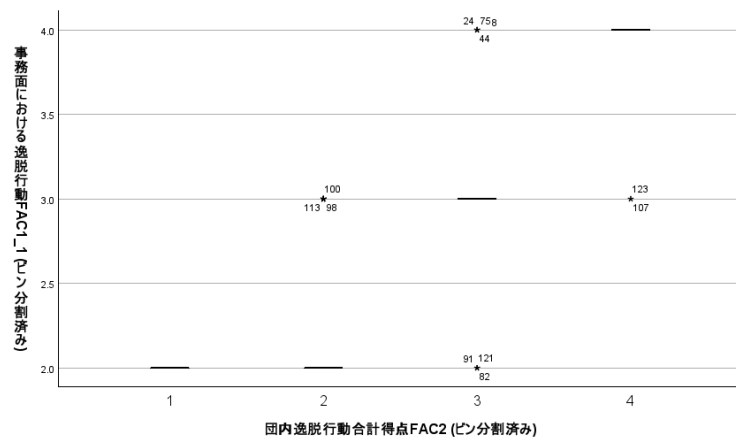


図 19 の箱ひげ図では「団内逸脱行動合計」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には正の相関がみられた。

図 20

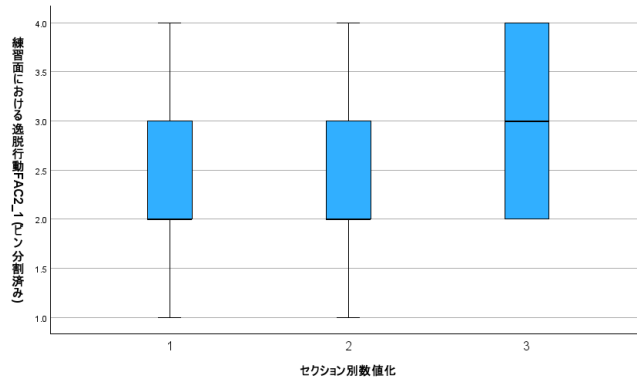


図 20 の箱ひげ図では「セクション別数値化 (1=弦楽器セクション, 2=木管セクション, 3=金管打楽器セクション)」と「練習面における逸脱行動」の関係である。

図 21

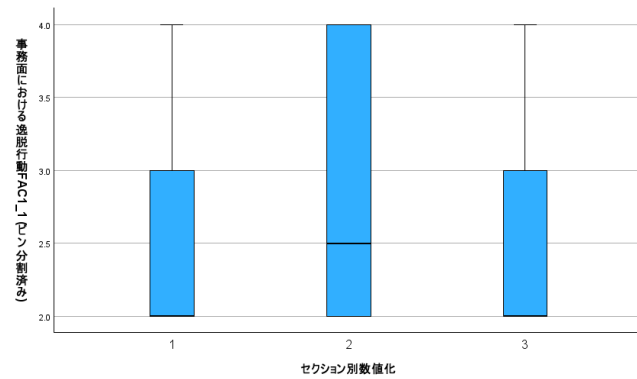


図 21 の箱ひげ図では「セクション別数値化 (1=弦楽器セクション, 2=木管セクション, 3=金管打楽器セクション)」と「事務面 (運営面) における逸脱行動」の関係である。

5. 考察

5-1. 記述統計の考察

楽団への関与度を問う質問に対する回答として、楽団内の役職経験は、練習指導や演奏面に関する役職経験者よりも楽団運営に関する役職経験者の方が多結果となった。この理由として、やはり大学生オーケストラサークル内における役職の多様性、体系の複雑さ

が挙げられるだろう。オーケストラサークルは基本的に100人以上の団員を抱える大規模のサークルであり、その運営には練習指導をする人よりも多くの人員を必要とされることが予想できる。「楽団組織の仕組みを理解している」「各役職の仕事内容を理解している」「楽団の運営に積極的に関与したい」「楽団の運営方針に満足している」という質問に対しては、「やや当てはまる」「よく当てはまる」と回答した人が6割から7割を占めた一方で、「自身の発言は楽団に影響力がある」という質問に関しては、約3割という結果となった。この理由として、団員に対して日常的に発言を行うことは団長や学生指揮者、コンサートマスターなどの役職に就いている者に限られることが予想されることに加えて、楽団を動かしている中心回生以外、特に低回生による発言のハードルの高さが関係していると考えられる。

練習に対する意識を問う質問に対する回答として、練習の集中度はレッスン時が突出して高く「とても集中している」という回答が半数以上という結果となった。この理由として、レッスンの外部講師や客演指揮者など、目上の者に対する礼儀や尊敬の態度が表れた結果であり、サークルの持つ肯定的な側面を読み取ることができるのではないだろうか。一方で、個人練習中の集中度は比較的低い結果となった。この理由として、個人練習は練習の中で唯一、他者から指導されないものであり、気の緩みが表れやすい時間であることに加え、Tuttiや分奏後の休憩時間として扱われることも予想される。「普段の練習内容に満足している」という質問に関して、現状の練習内容に満足せずさらなる高みを目指す人と、現状の練習内容についていけず満足できない人の両方が「当てはまらない」と回答してしまう可能性がある質問であったため、ややわかりづらく、練習への意識を問う質問としては不適當であったと考えられる。「練習頻度についてどのように感じるか」という質問に対して「ちょうど良い」と回答した人が約8割を超える結果となった。この理由として、学生が主体性を持って活動するサークルでは、無理のないサークル活動頻度が維持される仕組みが存在しているのではないだろうか。

音楽性への追求を問う質問に対する回答として、「普段クラシック音楽をよく聴く」「クラシックの演奏会に足を運ぶ」という質問に対し「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」との回答が約3割という結果となった。この理由として、大学生オーケストラサークルに参加する人は必ずしもオーケストラへの興味から参加するのではなく、他の要因、例えば、楽器を演奏する場所を求めた結果や、交友関係が関係していると考えられる。「楽器の演奏には自信がある」という質問に対し「やや当てはまる」「当てはまる」との回答が約3割とやや少ない結果となっている。この理由として、当然謙遜も含まれると考えられるが、サークル内で多くのプロ奏者と関わったり、レッスンを受けることによって楽器演奏の技術に上限がないと考える人が多いからではないだろうか。また、「楽器の演奏技術をもっと伸ばしたいと思う」という質問に対し「やや当てはまる」「当てはまる」との回答が大多数を占める結果となった。この理由としては、大学でも楽器を

続けている人は高校以前からの経験者も多く、また、プロ奏者と関わることで目標が明確になる環境が整っていることから、楽器演奏技術の上達欲求が非常に高くなると考えられる。

人間関係を問う質問に対する回答として、楽団全体への雰囲気満足度よりもパート内雰囲気満足度が高くなる結果となった。この理由として、オーケストラ内での生活のうち、大半の時間を同じパートの人と共有していることから、オーケストラ全体よりもパート内に帰属意識を感じやすくなっていると考えられる。

練習面における逸脱行動を問う質問に対する回答として、練習への出席頻度は練習に対する意識と同様にレッスン時が突出して高く「全て出席する」という回答が半数以上という結果となった。この理由として、先に述べたレッスンの外部講師や客演指揮者など、目上の者に対する礼儀や尊敬の態度の表れであることに加えて、レッスン講師へのレッスン代は補助金を除いて団費から支払われる場合がほとんどであり、金銭的な側面も存在するのかもしれない。また、逸脱行動をはかる質問として回答者ができるだけ答えやすいように、「(逸脱行動)をしないように心がけている」という聞き方をしたが、より正確性を期すためにも、「(逸脱行動)をしている」という質問をする必要があったと感じる。

5-2. 箱ひげ図への考察

(1) 練習面における逸脱行動

図13の箱ひげ図では「練習への意識」と「練習面における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、「練習への意識」が低ければ低いほど練習面における逸脱行動、つまり欠席や遅刻が多いことがわかる。一方で、「楽団への関与度」「音楽性の追求」「人間関係」は「練習面における逸脱行動」と相関は見られなかった。考えられる理由として、「楽団への関与度」「人間関係」が高くなればなるほどオーケストラへの帰属意識が高くなる一方で、団内の規範、練習に出席しなければならないという圧力から解放されやすくなったり遅刻しても許されやすくなる可能性があるのではないだろうか。

(2) 楽団の運営面における逸脱行動

図14の箱ひげ図では「楽団への関与度」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち、「楽団への関与」が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。考えられる理由として、「楽団への関与度」が高い人は役職に就く人が多いことから、役職を持つ人同士での連絡の取り合いや、交流が増え、結果として迷惑をかけたくないという考えが生まれるのではないだろうか。反対に、「楽団への関与度」が低い人は、提出物を集めたり集金をする人との接点がなく、「事務面（運営面）における逸脱行動」に対して罪悪感を抱きにくいのではないだろうか。

図 15 の箱ひげ図では「練習への意識」と「事務面（運営面）における逸脱行動」に負の相関がみられた。すなわち、「練習への意識」が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。考えられる理由として、「練習への意識」が高い人は図 13 のとおり出席頻度も高くなり、たくさん練習に参加することで多くの人との交流の機会が増え、また、役職に就く人や役職内容を把握しやすくなることから、その人に迷惑をかけたくないという考えが強まるのではないだろうか。

図 16 の箱ひげ図では「人間関係」と「事務面（運営面）における逸脱行動」には負の相関がみられた。すなわち「人間関係」の値が低ければ低いほど運営面における逸脱行動が多いことがわかる。先にも述べた通り、「人間関係」の得点が高ければ高いほど役職に就く人との交流する機会が増え、その人と仲良くなりやすくなることから、その人に迷惑をかけたくないという考えが強まると考えられる。

(3) 単位取得への不履行

図 17 の箱ひげ図では「単位取得への不履行」と「練習面における逸脱行動」には弱い正の相関がみられた。すなわち、単位取得への不履行をすればするほど練習面における逸脱行動も高くなることがわかる。仮説では、過度に練習に来る人は、単位取得への不履行が増えると考えていた。言い換えると、練習面における逸脱が増えれば増えるほど、練習以外に費やすことのできる時間が多くなり、単位取得しやすくなると考えていた。しかしながら、「単位取得への不履行」と「練習面における逸脱行動」には正の方向の相関がみられた。考えられる理由としては、練習に対してまじめな人、規範意識の高い人は学業の面でも規範意識は高いといえる。あるいは、本研究で想定していた過度な練習は、大学オーケストラサークル内には存在せず、5-1.でも挙げたように、学生が主体性を持って活動するサークルでは、無理のないサークル活動頻度、すなわち、学業への影響が少ないよう維持される仕組みが存在しているのではないだろうか。

6. おわりに

最後に仮説の検証をすると、「仮説 1) 管楽器は音楽性への追及が高くなり、逸脱行動が増える」に対する結果は、「音楽性への追及」と「練習面における逸脱行動」「事務面（運営面）における逸脱行動」は相関がみられなかったため、仮説 1) は支持されなかった。「仮説 2) 過度に練習に来る人は、単位取得の不履行が増える」に対する結果は、「単位取得への不履行」と「練習面における逸脱行動」には正の方向の相関がみられ仮説 2) は支持されなかった。考えられる理由としては、先にも述べた通り、練習に対してまじめな人、規範意識の高い人は、学業の面でも規範意識は高いと考えられる。「仮説 3) 集団での活動が多い弦楽器セクションの方が他セクションと比較して逸脱行動が多い」については、金管打楽器セクションと得点は同じであり支持されなかった。

本調査では、大学生オーケストラサークル内における逸脱行動について調査をしたが、回答者の規範に対する意識が高かった。考えられる要因として、Google Forms を活用しての質問紙調査であったものの、回答してくれる人は基本的に自己の規範意識が高い人が多いのではないかと感じた。特に、逸脱行動研究に関しては、本人の規範意識など回答するのが難しい質問もあるため Google Forms を活用したが、無作為に書面での回答をお願いする方法も必要になってくるのではないかと感じた。

7. 参考文献

- 新井洋輔・松井豊，2004「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」
- 新田健一，1975，「逸脱の研究—展望と問題」犯罪心理学研究第11巻第2号44-46
- 大木貴子・大月友，2012。「部活動における成功経験の有無と心理的対処能力および適応との関係」。人間科学研究，25，144
- 大島真男・浜島幸司・岩田弘三・竹内清，2003「キャンパスライフの研究—サークル，恋愛，アルバイトを中心に—」日本教育社会学会大会発表要旨集録，55，102-107
- 橋爪裕子・高木修，1995「クラブ・サークルへの加入から離脱までの意思決定過程究」
- 日本社会心理学会第36回大会，86-87.
- 高田治樹，2014，「大学生サークル集団への態度の探索的検討」29-46
- 高田治樹，2015，「大学生サークル集団研究の意義と課題」87-91
- 高田治樹，2022，「大学生の退学意図とサークル集団への所属ならびに偏差値との関連」，医療創生大学研究紀要第2号(通巻第35号)
- 宝月誠，2001，「逸脱行為の生成に関わる諸要因」京都社会学年報第9号1-8
- 毎日新聞，2018，「大学オケが抱える課題」